
星屑の独り言

月の雫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑の独り言

【Nコード】

N7360F

【作者名】

月の雫

【あらすじ】

好きと言っではいけない恋もある。だけど、ここだけでは言わせてください。苦しくて零れた思いの分だけでいいから…。

小さな願い

【左手の思い】

騒めく街を歩いたの

ただあなたの背中だけを見つめて

時折振り向いた瞬間に

ふと見せてくれる穏やかな笑顔が

私の心に深く入り込む

さり気なく引いてくれた手に

私の心臓の音が響かぬよう

静かに深呼吸してみた

そんな私の気持ちなんて

きっと気付いてないでしょう

私の隣にいるあなたの顔が

どんな表情をしているか

確かめる勇気もないから

ただ黙って歩くだけなんだ

ずっと煙草の臭いを感じながら

さつき交わしたキスを思い出し

繋いだ左手に思いを込める

あなたが好き

たぶん大好き

だから

もう少し歩かない？

もう少しこのままで

この手の温もりを

まだ感じていたいから

あなたの優しさを

この手で感じていたいから

【逢いたかったよ】

逢いたかったよ

ずっとずっと

逢いたかったよ

あなたにだけ

ずっとずっと

逢いたかったよ

あなたに逢ってから

何度も何度も

囁いていた

何度も何度も

叫んでいた

ねえ

私の声が聞こえてた？

もしも

私の声が聞こえていたら

私にも言って

逢いたかったよ

ただ一言だけでいいから

私の耳元で

そっと囁いて

抱き締めながら

ただ抱き締めながら

逢いたかったよ

私の気持ちの半分だけ

思ってくれるだけでいい

それだけで

私は黙って

あなたの腕の中へ

そっと滑り込める

黒い瞳を見つめながら

あふれる思い

【あなたでいっぱい】

もうあなたを思ふのはやめよう

あなたに期待するのめやめよう

あれから何度も言い聞かせていた

なのに

肌はあなたの温もりを忘れない

繋いだ左手は行き場をなくし

冷たい風にさらされているだけ

あの日に時間を巻き戻せたら

この手を放さなかったのに

そして

もつともつとキスをしたのに

ただ無駄に時間を過ごしてた

臆病だった愚かな私

あの日できなかったことが

大きな悔いとなって

私の胸を締め付ける

今大好きな曲を聴くたびに

あなたを思わずにいられない

何度も何度も繰り返し聴くから

私はあなたでいっぱいになる

その思いがあふれ出して

いくつもの涙が頬をつたわる

それでも私の中のあなたは

少しも小さくならず

愛しく笑っている

照れ臭そうに右手を軽くあげ

ずっと変わらぬ

あの優しい笑顔で

【一番嬉しかったこと】

待ち合わせの場所より近くに来てくれたこと

先を歩いてくれたこと

方向を変えるとき手を引いてくれたこと

二人きりになってすぐにキスしてくれたこと

キスのあと見つめてくれたこと

私の気持ちを待ってくれたこと

部屋を暗くしてくれたこと

ぴったり肌を重ねてくれたこと

ずっと頬をくつつけてくれたこと

終わった後に抱き寄せてくれたこと

そのまま腕枕してくれたこと

飲みかけのジュースをくれたこと

一つのお皿を分け合って食べたこと

綺麗な景色を観せてくれたこと

あなたも楽しんでくれたこと

記念の品を買ってくれたこと

遠回りしてくれたこと

見えなくなるまで目をそらさずいてくれたこと

短い時間の中で

嬉しいことはいっぱいあったけど

私が一番嬉しかったのは

忘れ物を届けてくれた後

電車で飛び乗ってくれたこと

別れを惜しんで

一駅一緒にいてくれたこと

もう少しだけ一緒にいたい

そう感じてくれたからでしょう？

私が見えない涙

気付いてくれたからでしょう？

だからドアの隙間を抜けて

隣に立ってくれたんでしょう？

あの瞬間から

あなたは私の一番になった

その後あなたが

誰を思っ
て誰と逢おうと

揺ぎようがないくらい

私の心の一番になった

例えあなたが後悔して

もう逢いたいと思わなくてもね

遠い星へ

真つ暗な闇夜に

裸足のまま立っていた

居場所をなくし

独りぼつちで立っていた

やがて月はそんな私の

足元を碧く照らし

手招きをする

こつちへおいで…

月の光に導かれ

やっとそこに辿り着くと

一人たたずむ彼がいた

待ってたよ…

温かな手にすがりつくと

彼は月の裏側を案内した

ここなら誰にも邪魔にされないよ

ひっそりと静かに暮らせるよ

私は手足を投げ出し深呼吸した

隠していた自分を無防備に曝け出した

今までにない穏やかな時が流れ

どれだけの間過ごしただろう

彼以外の人の話し声が聞こえてきた

ここには他にも住人がいた

それに気付くと急に住心地は悪くなり

ここが私の居場所でないことに気付いた

優しくった月と彼にそつとお礼を言い

私はこの地を離れた

振り返った月は碧く輝き

彼の姿を探してももうどこにもいない

私は遥か遠くに輝く星をめざした

そこで小さな光を放ち

私の存在を少しだけ知らせる

私の新しい居場所に誰も気付くことはない

ましてや彼が気付くことはない

ここは彼の視力では見ることが出来ないほど

遠く遠く離れている

そうでないともた私は行ってしまうから

彼に手招きされただけで

両手を広げられただけで

またその腕の中に飛び込んでしまいそう

そして

あなたは困ってしまうんだ

あなたの両手を自分の居場所とする人を

そこに待たせているから

あなたの優しい顔が悲しみに包まれる前に

私はまた自分からここを離れなければ

それが私に出来る唯一の

あなたに出来る思いやり

だから

私は遥か遠くの小さな星屑を

最後の居場所に決めたんだ

どんなに叫ぼうとも

声も届かぬほどの遠く離れたこの場所で

彼の幸せを願えるように

愛しい…

あなたの中の何が

私をこんなに引き付けるのだろう

あなたの中のどこに

これほど惹かれてしまうのだろう

いくつかの言葉は思い浮かぶけど

どれも何かが欠けている

人を好きになるのに

理由なんかいらない

それならば

あなたが私の中で

絶対的存在になるのにも

理由なんかないんだ

いつのまにか

あなたのメールが楽しみになり

気付いたときは

あなたからのメールだけを待っていた

一日中ずっと待っていた

日に日に強くなる

あなたの残像が

私の中で鮮明になったり

透けて消えてしまったり

そして

だんだん分からなくなる

どこまでのあなたが実物で

どこまでのあなたが幻影か

私の作り出した虚栄は

時として私を苦しめる

「君だけが僕の特別」

それが事実と違っていても

現実とはかけ離れた事でも

私はそう信じたい

もっと愛して欲しい

一番愛して欲しい

それほどあなたに

夢を見たい

あなたに逢いたい

ただ

あなたに逢いたい

そして確かめたい

私の中のあなたが

勝手に膨らんだ幻でなく

実在するあなただつて

私の愛しい愛しい

奇跡なんだつて

もしもあなたが

例え少しでも

そう感じてくれるなら

南の空の三日月に

ぶら下がってはしゃいでいる

あのダイヤモンドを

あなたに送りたい

そんな無茶なことを

言えてしまうほど

きつと嬉しいはずなのに

金と銀

あなたからのメールには

いつも綺麗なリボンが

掛けられている

届いた時から

嬉しい予感がして

少しだけ心が踊る

きつと素敵な言葉が

たくさん詰まっている

私のため一生懸命

選んでくれた言葉に

掌で暖めて咲かせた

一輪の花が添えられて…

だから

私からのメールにも

リボンを掛けよう

どこにでもある

安物のリボンだけど

私が持っている中で

一番のお気に入り

そのリボンの上に

私の掌で掴んだ

小さな小さな星の屑を

そつと振り掛ける

すると

誰にも気付かれない

秘密のリボンの出来上がり

これを解くとき

金と銀の粒が舞散って

透き通る輝きが

あなたの心を

優しく照らしますよう

私の目に映る輝きを

出来ることなら

そのまま届けたいけど

それが無理なこと

私が一番知っているから

少しだけ届けたい

あなたの邪魔にならない

僅かな光を

あなたの心の中に

ありがとうの気持ちを

たくさん添えて

あなたの幸せを願う

寂しい気持ちは

絶対に気付かれない

箱の底の片隅へ

そして

あなたを一番と思う私に

さよならをいおう

もう十分だよね

今まで楽しかったよね

たくさんたくさん

思ってたよね

昼も夜も

あなたでいっぱいだった

でも

もう終わりにするね

ちょっと疲れちゃった

だから

帰ることにしたんだ

目をつぶっていても

ちゃんと辿り着ける

そんなところへ

夜空を見上げて

【今夜の月を】

今夜の月は

少しだけ大きい

いつでもいいよと

両手を広げているように

今夜の月は

真っ白に光る

すべて優しく包み込む

柔らかな新雪のように

今夜の月は

ちよと神秘的

薄い雲が掛かって

まだ知らないあなたのように

今夜の月は

二人のおもいで

私はあなたを想い

あなたは私を想ってくれた

今夜の月を

私は一生忘れない

せめて夢で逢おうと

あなたが言ってくれたから

【ヴィーナス】

眠れなかった明け方に

優しく輝く星を見た

夜はこれからという時に

一足先に立ち去った

南の空のダイヤモンド

私が一番淋しくなると

いつのまにかまた現れる

大丈夫だよ

君は一人じゃないんだよ

明け方に戻ってきては

今日も私に語り掛ける

そして

私は今頃になって

やっと眠たくなってしまう

体の真ん中が

少し温まってきたから

布団の中に入ったら

瞳を閉じて

あなたの顔を思いだす

黙ったまま静かに笑い

私の髪を撫でながら

そっとキスして

あなたの広い腕の中へ

また髪を撫でられたら

私はところ構わず

あなたにキスをしてしまう

くすぐったそうにしながらも

されるがままの優しい人を

唇と体で包んで眠ろう

言葉に出さなくても

きっとあなたは知っている

私^があなたを好きだって

ねえ

そいつでじゅんぽう？

今頃になって

久しぶりにメールがきた

何度か無視し続ければ

諦めてくれると思ってた

でも

なぜなんだろう

今日は無視できなかった

だから…電話した

「久しぶりに声聴けたな」

懐かしい澄んだ声

その声を聴いたら

涙があふれてきた

でも

なぜなんだろう

私は他の人を好きになった

「つらい恋はもう懲り懲りだよ」

貴方に言いながら

自分自身に言った

「淋しい思いももう懲り懲りだよ」

貴方に言いながら

必死で思い出してた

だからもう逢わないの

何度誘われても

もう逢わないの

そう決めたの

だからお願い

もうメールしてこないで

もう誘わないで

優しい言葉かけないで

今になって言わないで

お前だけなんて

私はもう貴方なんて

全然愛してない

私は私だけを愛してると

何があっても揺るがないと

言ってくれた人だけを

これから愛していくの

そんな私に

貴方の愛は要らないの

だからお願い

「声が聴けただけでいい」

そんな言葉を吐かないで

付き合った七年の間

好きと言ったのは

たった三回なんだから

「早く他の人見つけてね」

そんな私の冷たい言葉に

あなたは初めて

愛の言葉を投げ掛ける

「俺にはお前だけだよ
今までもこれからも」

貴方はずるいね

今まで一度だつて

そんなことは言わなかった

出来ることなら

一生言わないで欲しかった

今聴くと苦しいよ

他の人を愛してく

優しい言葉と愛で

毎日包んでくれる

そんな人と生きていく

そう決めてしまったの

この前

そう決めてしまったの

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7360f/>

星屑の独り言

2010年10月22日00時13分発行